

# 子ども・保護者と歩む 「教育DX」

山本宏樹

本稿では二〇三〇年を目処に進行する「教育DX」の論点を素描しつつ、改革の荒波を子ども・保護者と共に進むために何が必要かについて検討していきたい。

## 一 中国の「公教育のデジタル化」実験

まず議論の素材として中国の「公教育のデジタル化」実験を扱った二〇一九年の記事を引用しよう。

昨年、全国で進められた小中学生に対するデジタル端末の配付は、国の進めるデジタル公教育改革を象徴する「二大事」であった。だが、改革のロードマップからすれば、それはまだ序の口に過ぎない。中心人物の一人である経済産業省の浅野大介が述べているとおり、今回の改革のゴールは「教育DX（デジタル・トランスフォーメーション）」すなわちICT環境を活用した「生徒の学び方と先生の働き方の生まれ変わり」<sup>(1)</sup>であって、「一人一台端末」はその布石の一つに過ぎないからである。

幼稚園でも大学でも、デジタルカメラが生徒をスキャンし、教師の後ろで手を挙げている生徒やおしゃべりしている学生を検知する。顔認識ロボットが出席を取り、幼児に質問する。Bluetoothウースのリストバンドが生徒の心拍数、図書館や園庭・校庭の滞在時間を記録する。推進派はそうした情報について、学校の安全性を高め、教師が学習の進歩を数値化するのに役立ち、より個人に即した教育が可能になると話す。

(略)

金華孝順小学校のヘッドバンドは米マサチューセツ



図1



図2

ツ州の新興企業 BrainCo が開発した。三つの電極（額に一つ、耳の後ろに二つ）を使って脳の電気的活動を検知し、教師のコンピューターにデータを送っている。ソフトウェアは生徒の注意のレベルに関するアラートをリアルタイムで発し、授業の終わりにその分析を行う。

教師は教室でのAI利用について肯定的な成果が上がっていると報告する。

BrainCoの米国事務所を率いるマックス・ニューロンは「誰が集中し、誰がしていないか、教師は直感的に分かる」と話す。「私たちが目指しているのは、そうした感覚的なものを数値にすることだ」(略)

使い始めてから学期の半分が過ぎると、このクラスの試験の成績は四年生の全クラスの中で二段階上昇した。

一部の教師と生徒はヘッドバンドの見かけを、「西遊記」に出てくる金の輪に例えている。孫悟空が悪さをし、三蔵法師が経文を唱えると、頭を絞めつける輪だ。六年生の男子生徒ヤン・チャンシユワン君は、学校から時々送られてくるレポートに書かれた低い集中の度合いを両親が見るとプレッシャーを感じると話す。

やまもと ひろき  
大東文化大学准教授  
関連論文  
「どうなる？日本の英語公教育」『新英語教育』（2022年6月号）  
「GIGA スクールの科学的根拠」『教育』（2021年11月号）  
「超情報社会における公教育の基本問題」『教育』（2021年8月号）  
「GIGA スクール2030」『クレスコ』（2021年7月号）など